

[Research Report]

Research trends of nursing college teachers

Yoko Taira*, Yayoi Ohmachi**, Mika Kataoka*** and Yukari Matsuzaka****

* Shiga University of Medical Science, School of Medicine Department of Nursing

** Aino University, Department of Nursing Faculty of Nursing and Rehabilitations

*** Gifu College of Nursing

**** Tokai University, School of Health Science Department of Nursing

Abstract

The number of nursing colleges is increasing. The purpose of this study is to acquire basic data in order to assess current and future issues facing teachers of nursing.

Therefore the research trends were surveyed. References for the past twelve years were searched. We then selected and analysed research papers concerned with the subject of teachers of nursing.

Consequently we found that the number of research papers on this subject increased in accordance with the growth of the number of nursing colleges. However the number of papers is not sufficient to clarify and resolve the issues relating to the rapid increase of nursing colleges. It is especially important to focus on raising the quality of nursing education at both the organizational and individual level.

Key words : college of nursing, teachers, the tendency of study

看護系大学教員を対象にした研究の動向

平 良 陽 子*, 大 町 弥 生**, 片 岡 三 佳***, 松 坂 由 香 里****

【要 旨】 本研究は、増加してきた看護系大学の教員が抱えている課題および今後取り組むべき課題を検討するための基礎資料を得ることを目的に、看護系大学教員を含む看護教員を対象にした研究の動向を概観した。過去12年間の文献を検索し、看護系大学教員を含む看護教員を対象にしている研究を抽出し分析した。その結果、看護系大学教員を対象にした研究は、大学数の増加に伴って増加傾向にはあるが、急激な大学の増加に伴う諸問題を明確にし、解決するには、その分野の研究論文数はまだ十分ではないと思われた。特に、教員個人と、組織としての大学の両面において、質を保つための探究が、よりよい看護学教育を行っていくために重要な鍵を握ると考えられた。

キーワード：看護系大学，教員，研究の動向

はじめに

保健医療福祉の急速な変化に伴い看護系大学が急速に設立され、その数は1992年では12校に過ぎなかったものが、2004年4月現在、119校となっている¹⁾。変化・発展のめざましい看護基礎教育機関に所属する教員には、常に自己成長や自己教育力が必要とされていると言われて²⁾。しかし我が国では、教員としての自己成長や自己教育力を保証するための具体的施策は打ち出されているとは言いがたい状況である³⁾。このような状況において、看護の質の向上と安定した望ましい水準の看護の提供のために、様々な看護研究が行われている。中でも、看護基礎教育機関に所属する教員を対象とした研究は、自己の教育に対する反省

や、教育水準を向上させる努力をし続ける姿勢につながると考える。

そこで本研究では、増加してきた看護系大学の教員が抱えている課題および今後取り組むべき課題を検討するための基礎資料を得ることを目的に、看護系大学教員を含む看護教員（「看護教員」とは、看護系大学、看護系短期大学、看護専門学校などの看護基礎教育機関に所属する教員をさす用語と定義する）を対象にした研究の動向を概観することにした。

方 法

1. 対象文献

変化・発展のめざましい状況下にある看護系大学の

* 前滋賀医科大学 医学部看護学科
** 藍野大学 医療保健学部看護学科
*** 岐阜県立看護大学
**** 東海大学 健康科学部看護学科

教員がもつ課題を検討するために、看護系大学が急速に設立され始めた1990年代から現在までの研究の動向を把握することが有効であると考えた。そこで、入手が可能であった1992年から2003年までの文献を検索することとした。

対象とした文献は、“看護教育に関する研究が報告される学会誌であること”、“学会誌ではないが常に最新の研究が報告される学会誌であること”、“学会誌ではないが看護教育についての研究が掲載される商業誌であること”を根拠として選択した以下の5誌である。これらの5誌に掲載された、看護系大学教員を含む看護教員を対象にした過去12年間（1992～2003年）の研究論文および学会発表抄録を抜粋した。

- 1) 日本看護学教育学会誌（日本看護学教育学会発行）
- 2) 日本看護研究学会雑誌（日本看護研究学会発行）
- 3) 日本看護科学学会誌（日本看護科学学会発行）
- 4) 日本看護学会集録－看護教育－（日本看護協会発行）
- 5) 看護教育（医学書院発行）

2. 抽出の基準

以下の3点を抽出の基準とした。

- 1) 対象者に看護系大学教員を含む看護教員が含まれている研究。
- 2) 看護基礎教育における課題（場面）をテーマにしている研究で、看護教員養成所における課題をテーマにしている研究は除く。
- 3) 抽出後、テーマ名および研究者名などから、明らかに同一の研究と分かるもの、すなわち原著論文と学会発表の抄録については、論文として報告されているものを優先する。

3. 研究内容の分類

研究内容の分類は、①看護系大学教員を含む看護教員を対象にしている研究（ここには②が内包されている）、②看護系大学教員のみを対象にしている研究の2段階で行なった。抽出した研究論文・学会発表抄録のテーマおよび内容から、その研究の焦点をラベルに置き換え、ラベルの意味内容ごとにKJ法に準じて分類した。原則として1研究1ラベルとした。研究内容の判断に、主として「研究テーマ」を用いた理由は、看護研究のテーマには、その研究の焦点が最もよく表

現されていると考えたからである。

4. 看護系大学教員のみを対象にした研究の検討

研究内容の分類によって浮き彫りとなった、過去12年間の看護系大学教員のみを対象にした研究の動向から、関心が寄せられる傾向にあるテーマを把握し、それらの研究論文の内容を検討する。それは、関心が寄せられているテーマには、看護系大学教員が抱えている課題が包含されていると考えたからである。

結 果

1. 文献数の年次推移（表1）

対象となった5誌の文献9,998件のうち、看護系大学教員を含む看護教員を対象にした研究として抽出されたものは259件（約2.59%）であった。看護系大学教員を含む看護教員を対象にした研究数が全研究数に占める割合は1992年では約0.90%（6件）に過ぎなかった。その割合はその後、前年よりやや減少する年はあるものの2003年には約3.58%（42件）と増加している。看護系大学教員のみを対象にした研究数においても、1992年では、全研究数に占める割合が約0.15%（1件）に過ぎなかったものが、2003年には約0.68%（8件）と増加している。

2. 対象文献の分類

- 1) 看護系大学教員を含む看護教員を対象にした研究の分類（表2）

看護系大学教員を含む看護教員を対象にした259件の研究のテーマは17個のラベルで置き換えられ、意味内容ごとに分類した結果、4項目が導き出された。

表1 文献数の年次推移

| 年 | 全研究数 (A) | 看護系大学教員を含む看護教員を対象にした研究数 (B) | 看護系大学教員のみを対象にした研究数 (C) | | |
|------|----------|-----------------------------|------------------------|----------|-----|
| | | | B/A | C/A | C/B |
| 1992 | 663 | 6 (0.90%) | 1 (0.15%) | (16.67%) | |
| 1993 | 690 | 14 (2.03%) | 2 (0.29%) | (14.29%) | |
| 1994 | 725 | 16 (2.21%) | 1 (0.14%) | (6.25%) | |
| 1995 | 815 | 8 (0.98%) | 1 (0.12%) | (12.50%) | |
| 1996 | 738 | 14 (1.90%) | 2 (0.27%) | (14.29%) | |
| 1997 | 721 | 16 (2.22%) | 1 (0.14%) | (6.25%) | |
| 1998 | 742 | 25 (3.37%) | 0 (0.00%) | (0.00%) | |
| 1999 | 854 | 25 (2.93%) | 2 (0.23%) | (8.00%) | |
| 2000 | 930 | 31 (3.33%) | 3 (0.32%) | (9.68%) | |
| 2001 | 886 | 27 (3.05%) | 9 (1.02%) | (33.33%) | |
| 2002 | 1,060 | 35 (3.30%) | 12 (1.13%) | (34.29%) | |
| 2003 | 1,174 | 42 (3.58%) | 8 (0.68%) | (19.05%) | |
| 計 | 9,998 | 259 (2.59%) | 42 (0.42%) | (16.22%) | |

表2 看護系大学教員を含む看護教員を対象にした研究の分類

| 分類 | 件数 | 研究テーマの例 |
|--------------------|----|--|
| 1. [教員としての資質・成長発達] | 92 | 「看護教員の能力・資質形成の契機」 ¹⁶⁾ 「看護系大学の卒業生に、大学の教員および臨床看護婦が期待する能力」 ¹⁴⁾ |
| 〈教員としての成長発達〉 | 30 | |
| 〈教育への思い〉 | 25 | |
| 〈教員としての資質〉 | 23 | |
| 〈教員としての役割認識〉 | 6 | |
| 〈教員としてのニーズ〉 | 4 | |
| 〈教育場面での意思決定〉 | 4 | |
| 2. [実習・講義・研究の方法] | 88 | 「成人看護臨床実習におけるカンファレンスの展開の構造とその意義」 ¹⁷⁾ 「批判的内省研究の分析方法の検討」 ¹⁸⁾ |
| 〈臨地実習〉 | 53 | |
| 〈講義・演習〉 | 30 | |
| 〈研究活動〉 | 5 | |
| 3. [カリキュラム・教育システム] | 43 | 「新カリキュラムに対する教育関係者の反応—1. 学校・臨床側の意見—」 ¹⁹⁾ |
| 〈教育全般のシステム〉 | 29 | |
| 〈カリキュラム〉 | 14 | |
| 4. [教員のメンタルヘルス] | 36 | 「看護教員のストレス測定尺度の作成」 ²⁰⁾ 「新人看護教員の悩みと個人的特性との関連」 ²¹⁾ |
| 〈不安〉 | 13 | |
| 〈ストレス〉 | 10 | |
| 〈悩み〉 | 5 | |
| 〈満足感〉 | 4 | |
| 〈日常生活・余暇活動〉 | 2 | |
| 〈業務状況〉 | 2 | |

[] は項目を、〈 〉 は含まれるラベルを表す。

表3 看護系大学教員のみを対象にした研究の分類

| 分類 | 件数 | 研究テーマの例 |
|--------------------|----|---|
| 1. [教員としての資質・成長発達] | 6 | 「看護系大学教員（臨床看護学助手）の成長につながる体験—他教員との関わりからの学び—」 ⁴⁾ |
| 2. [実習・講義・研究の方法] | 15 | 「看護系大学における小児看護学の授業の実態」 ⁵⁾ |
| 3. [カリキュラム・教育システム] | 4 | 「大学教育における基礎看護学の現状と課題—12校の踏査結果から—」 ⁶⁾ |
| 4. [教員のメンタルヘルス] | 17 | 「看護教員（看護学助手）の職務における悩みと成長につながる体験」 ⁷⁾ |

① [教員としての資質・成長発達] は、〈教員としての成長発達〉〈教育への思い〉〈教員としての資質〉〈教員としての役割認識〉〈教員としてのニーズ〉〈教育場面での意思決定〉の6つのラベルを、② [実習・講義・研究の方法] は、〈臨地実習〉〈講義・演習〉〈研究活動〉の3つのラベルを、③ [カリキュラム・教育システム] は、〈教育全般のシステム〉〈カリキュラム〉の2つのラベルを、④ [教員のメンタルヘルス] は、〈不安〉〈ストレス〉〈悩み〉〈満足感〉〈日常生活・余暇活動〉〈業務状況〉の6つのラベルを含んでいた。

2) 看護系大学教員のみを対象にした研究の分類（表3）

看護系大学教員のみを対象にした研究は42件であり、意味内容ごとに分類した結果、看護系大学教員を含む看護教員を対象にした研究の分類と同様に4項目が導き出された。① [教員としての資質・成長発達]

に関する研究は、「看護系大学教員（臨床看護学助手）の成長につながる体験—他教員との関わりからの学び—」⁴⁾ などの6件、② [実習・講義・研究の方法] に関する研究は、「看護系大学における小児看護学の授業の実態」⁵⁾ などの15件、③ [カリキュラム・教育システム] に関する研究は「大学教育における基礎看護学の現状と課題—12校の踏査結果から—」⁶⁾ などの4件であった。④ [教員のメンタルヘルス] に関する研究は、「看護教員（看護学助手）の職務における悩みと成長につながる体験」⁷⁾ などの17件で4項目中最も多かった。

考 察

1. 看護系大学教員を含む看護教員を対象にした研究数の年次推移

看護系大学教員を含む看護教員を対象にした研究は

全研究数に対する割合からみても、年々増加傾向にあることが明らかになった。看護基礎教育には、教員の他、学生、臨地指導者、対象となるクライアントなどの様々な人的変数が関与している。看護教員を対象にした研究が増加傾向にあるということは、看護基礎教育において教員の担う役割や責任が見直されてきていると考えられる。

2. 看護系大学教員のみを対象にした研究の動向

看護系大学教員のみを対象とした研究においては、教員自身のメンタルヘルスをテーマにしたものが比較的多い。その背景として、教員の準備が整わないまま看護系大学が急増したことで、個々の教員に大学教員としての姿勢や力量への不安があることが考えられる。また、看護系大学教員には、厚生労働省・都道府県・日本看護協会などが開催する専門学校教員養成課程のようなフォーマルなサポート体制が確立されていないことも、教員の不安につながっているのではないかと考える。そこで本稿ではそれらのストレスに耐えうる人材育成のための支援や、教員自身が自己を客観的に分析する必要性を重視し、看護系大学教員のメンタルヘルスについての研究およびメンタルヘルスに関連する「教師効力」についての研究を中心に検討した。

1) 教師効力をテーマにした研究

坪井と安酸⁸⁻¹⁰⁾は、看護系大学助手の「教師効力」をテーマにして研究に取り組んでいる。そして実習教育に関する教師効力には、「教育学履修歴」「助手に就く前の実習教育の研修受講歴」「助手に就く前の教師経験」「助手に就いてからの教師経験年数」が有意に影響していることを明らかにした。さらにその結果をふまえて質的研究も行っている⁹⁾。その結果から教師効力の向上のためには、教員を取り巻く実習教育環境の調整を行なうことと、実習教育経験の中でうまくいったと思える状況を自分の強みとしていく必要性を示唆している。これらの研究結果から、大学における看護教育にあたる教員には、教育活動について客観的に自己評価できる能力が求められていると考える。

2) 教員のメンタルヘルスをテーマにした研究

出羽澤^{4,7)}は、看護系大学助手の悩みをテーマにして研究に取り組んでいる。そして、助手は実習などの教育活動に対する悩みを多く抱えていると同時に、悩むことは自己の成長であると認識していると明らかにした。さらに看護系大学助手が自己の成長につながっていると認識した場面は、講座の上司・先輩教員・同僚との関わりや、学生からのフィードバックがあった

場面である⁷⁾。

この結果を坪井ら⁹⁾の研究結果と合わせて考察すると、看護系大学助手は「教育活動上の困難」に遭遇することをきっかけとして、客観的な自己評価に取り組んでおり、そのことが教員としての成長につながっていると考えられる。さらに、助手が「教育活動上の困難」を前向きにとらえた場合には、上司・先輩教員・同僚・学生から積極的にフィードバックを得ようとするため、内省のための貴重な資源を多く得ることができる。つまり、「教育活動上の困難」と遭遇することは、自己評価を客観的にしていくためのきっかけとして重要であり、その「困難」に対して助手が前向きな姿勢であるならば、教員としての成長をさらに促進させる因子となり得るのである。

しかしながら、看護系大学助手を対象にしたメンタルヘルスに関する調査¹¹⁾では、精神的不健康を有する可能性が高いリスクをもった助手の割合が75.2%と高値であった。このことから、「教育活動上の困難」は成長を育む反面、他者からのフィードバックが得られることが必要である。また自身のコーピングスタイルの如何によっては、メンタルヘルスに悪影響を及ぼすことも考えられる。今後は教員自身の資質やコーピングスタイルとメンタルヘルスの関連性も含めて検討していく必要があることが示唆された。

3. 看護系大学教員の今後の課題

ほとんどが青年期にある大学生は自我意識の高揚とそれに関連して、内面に多発する悩みの多い世代である¹²⁾。さらに現代青年は人間関係の築き方がますます不得手になってきている¹⁶⁾。このような学生の傾向は看護系大学においても例外ではない。それに加えて、看護系大学の卒業生には他の課程の卒業生よりも高い能力が期待されている¹³⁻¹⁵⁾。看護系大学では、価値観が多様化している学生に対して、社会の期待に見合う教育を行なえるような質の高い教育が求められており、そのためには教員個人の質の向上・維持が必須であると考えられる。ここ数年でみられるようになってきた、教員自身の資質やメンタルヘルスをテーマにした研究は、教員個人の質の向上・維持について追及していく上で大変有用であると思われる。しかしながら、これらの研究分野の探究はまだ十分とは考えられず、今後さらなる取り組みが必要であると思われる。また、看護系大学における教育の水準には、教員個人の質ばかりでなく、大学としての理念も強く影響していると考えら

れるため、大学という組織としての質を探究する研究も進められていくべきであると考え。

ま と め

看護系大学教員を対象にした研究は、大学数の増加に伴って増加傾向にはあるが、急激な大学の増加に伴う諸問題を明確にし、解決するには、その分野の研究論文数はまだ十分ではないと思われた。特に、教員個人と、組織としての大学の両面において、質を保つための探究が、よりよい看護学教育を行っていくために重要な鍵を握ると考える。

なお本研究の要旨は、第29回日本看護研究学会学術集会（大阪市，2003年）において報告している。

引用文献

- 1) 東京アカデミー：看護系大学一覧。[引用2004-10-22] <http://www.tokyo-ac.co.jp/med/m0-1kandai.htm>
- 2) 小山真理子，大串靖子，小田正枝，浅川明子，高橋弘子，鳥海千代子，中村幸子，田村やよひ：看護教師の資質の発展への看護基礎教育機関の取り組み—その1. 教師の資質発展への環境—。日本看護学教育学会誌10(2)：138, 2000
- 3) 田中幸代：大学教員に求められる教育力向上のために。教育心理学研究46(4)：107-117, 1998
- 4) 出羽澤由美子：看護系大学教員（臨床看護学助手）の成長につながる体験—他教員との関わりからの学び—。日本看護科学学会学術集会講演集：418, 2002
- 5) 松尾ひとみ：看護系大学における小児看護学の授業の実態。日本看護研究学会雑誌20(3)：244, 1997
- 6) 三浦まゆみ：大学教育における基礎看護学の現状と課題—12校の踏査結果から—。日本看護学教育学会誌10(2)：207, 2000
- 7) 出羽澤由美子：看護教員（看護学助手）の職務における悩みと成長につながる体験。日本看護科学学会学術集会講演集：366, 2001
- 8) 坪井桂子，安酸史子：看護系大学教師の実習教育に対する教師効力尺度の検討。日本看護科学学会誌12(2)：37-45, 2001
- 9) 坪井桂子，安酸史子：看護教師の実習教育に対する教師効力に影響する状況の分析—フォーカス・グループ・インタビュー法を用いて—。日本看護学教育学会誌12(2)：1-14, 2002
- 10) 坪井桂子，安酸史子：看護教師の実習教育に対する教師効力と不安に関する検討。日本看護学教育学会誌12：288, 2002
- 11) 片岡三佳，岩満優美，川上陽子，松坂由香里，大川匡子，瀧川薫：看護系大学に勤務する助手の精神的健康に関する研究—職務状況とその満足感から—。滋賀医科大学看護学ジャーナル2(1)：35-45, 2004
- 12) 吉田辰雄：児童期・青年期の心理と生活。日本文化科学社，3-23頁，1990
- 13) 宮坂順子：看護婦が卒業時に獲得することを期待されている能力に関する研究—看護管理者・看護教員・新人看護婦の期待度との比較—。日本看護科学学会誌12(3)：206-207, 1992
- 14) 小山真理子：看護系大学の卒業生に，大学の教員および臨床看護婦が期待する能力。日本看護科学学会誌13(3)：276-277, 1993
- 15) 小山真理子：看護系大学の学生が卒業時に習得していることを期待される能力。日本看護科学学会誌14(3)：366-367, 1994
- 16) 江崎フサ子：看護教員の能力・資質形成の契機。日本看護学教育学会誌6(2)：101, 1996
- 17) 正木治恵：成人看護臨床実習におけるカンファレンスの展開の構造とその意義。日本看護科学学会誌13(3)：302-303, 1993
- 18) 稲吉光子：批判的内省研究の分析方法の検討。日本看護科学学会誌16(2)：152, 1996
- 19) 森田チエ子：新カリキュラムに対する教育関係者の反応—1. 学校・臨床側の意見—。日本看護学教育学会誌6(2)：115, 1996
- 20) 坂井恵子：看護教員のストレス測定尺度の作成。日本看護研究学会雑誌25(3)：395, 2002
- 21) 坂井恵子：新人看護教員の悩みと個人的特性との関連。日本看護学会集録（看護教育）28：5-8, 1997